

[Original Paper]

**Understanding young and elderly adult clients :
Content analysis of nursing students' reports on what they have learned
through conducting an interview**

Ryoko Itoh*, Yayoi Ohmachi*, Yumi Nakayama*, Shigeaki Watanuki*,
Masumi Miyaji*, Naomi Hiraki* and Fumiko Tsujimura*

* Department of Nursing, Faculty of Nursing and Rehabilitation, Aino University

Abstract

The purpose of this study is to clarify what nursing students (the students, hereinafter) have learned through interviews with young or elderly adults (the clients, hereinafter). Each of the students was asked to write a report about how s/he approached a client to obtain her/his consent for an interview, and how s/he communicated with the client to learn about her/his life. The contents of the students' reports about their interviews were analyzed after they had been assured of voluntary cooperation and anonymity. The results show that the students have learned the following: (1) the background of each client such as age, times when s/he has been living or her/his living environment may affect her/his activities of daily living and attitude toward life; (2) each client has her/his own life history. Through such interviews and report writing, the students have understood the importance of the basic rules of communication including having respect for their clients and taking interest in their conversation subjects. Additionally, the students have recognized the difference between themselves and others (i. e., the individual clients) while communicating with them. These results suggest that the assignment to conduct an interview and to write a report is one of the effective methods for the students to understand young and elderly adult clients (i. e., people) of different generations from their own.

Key words : understanding clients, young adults, elderly adults, interview, content analysis

成人期・老年期にある対象の理解

—— インタビューを行った看護学生の学び ——

伊藤良子*, 大町弥生*, 中山由美*, 綿貫成明*
宮地真澄*, 平木尚美*, 辻村史子*

【要旨】 本研究の目的は、看護学生（以下、学生）が成人期・老年期にある人にインタビューを行い、インタビューを通してどのような学びがあったのかを明らかにすることである。

学生がインタビューを通して学んだ内容をレポートし、本研究においてそのレポート内容を分析した。その結果、学生は生きてきた時代背景や生活環境がインタビュー対象者の生きる姿勢に影響しており、過去の積み重ねの上に今のその人があることを学んでいた。また、学生はインタビュー対象者を理解するにはその人に関心を持ち、尊重しながら接することや、コミュニケーションに求められる基本的な態度を示すことの重要性を学んでいた。さらに学生は、対象とコミュニケーションを図る中で自己と他者の違いを改めて認識し、個としての対象を理解していた。このことより、インタビューは学生が自分たちとは世代の異なる成人期・老年期にある対象を理解するための有効な学習方法の一つであることが示唆された。

キーワード： 対象の理解，成人期にある人，老年期にある人，インタビュー，内容分析

1. はじめに

看護はあらゆる世代の人を対象として実践する。しかし近年核家族化が進み、日常生活の中で世代の異なる人と関わる機会が減少しており、コミュニケーションが円滑に図れず、深い関わりを体験することも少なくなってきた。そのため、学生が世代の異なる対象を理解することは容易ではない。鳴澤¹⁾は、今の若者の対人関係について、少子化に伴い社会的な経験や成熟の機会が乏しいために人間関係が希薄・過敏で傷つきやすく、いつまでも自己中心的で人の気持ちが適確に理解できないことを指摘している。

そこで、近畿圏内の看護系大学では1年次前期の科目「対象の理解I」の授業において、学生が、自分自

身がどのような人間であるかを理解すると共に、看護の対象となる成人期・老年期にある人を理解し、人間関係を築き上げていくプロセスを学ぶことを学習目的として授業に取り組んでいる。講義では、成人期・老年期にある人は、ライフステージを通して身体機能や社会的役割など発達課題の変化が著しく、また個人差も大きいことを教授している。そして今回、講義で学習した一般的な成人期・老年期の特徴を踏まえてコミュニケーションを図り、対象を理解することを目的として成人期・老年期にある人にインタビューし、学んだ内容をレポートするという課題を出した。

看護教育において、インタビューは学生が成人期もしくは老年期にある人を理解するための学習方法の一つとして用いられている²⁻⁵⁾と報告されている。しか

* 藍野大学医療保健学部看護学科

し、成人期から老年期までの人をインタビュー対象者とし、インタビューを通して学生が理解した内容をまとめている文献は見当たらない。そこで本研究において、学生がインタビューを通して成人期・老年期の各世代の人をどのような視点で理解したのか、またそこから学んだ内容について分析し、その教育方法を検討することは意義深いと考えた。

II. 研究目的

学生が成人期・老年期にある人にインタビューを行い、インタビューを通してどのような学びがあったのかを明らかにすることである。

III. 対象と方法

本研究は、質的記述研究の手法として内容分析を用いた。内容分析とは、コミュニケーションの内容を客観的、体系的、数量的に記述するための調査方法であり、データをもとにそこから文脈に関して妥当な推論を行う調査技術である⁹⁾。本研究では学生のレポート、すなわち言語的に記述されたコミュニケーションの内容をデータとしており、内容分析の方法が適していると考えた。

1. 対象

近畿圏内の看護系大学において1年次前期の科目「対象の理解I」を受講した88人

2. データ収集期間

2005年12月1日～12月16日

3. データ収集方法

「対象の理解I」の課題として、成人期・老年期にある人にインタビューを行い、その学びをレポートに記述し、提出させた。科目の成績評価が終了した後、レポートを学生に返却し、研究の趣旨・方法について説明し、同意が得られた学生にレポートの複写許可を依頼した。学生88人のうち、研究への協力に同意が得られた62人のレポートに記述された内容を分析の対象とした。

学生がレポートを作成するまでの過程は、以下の通りである(資料1)。

1) インタビュー対象者を自由に選択し、インタビューの趣旨を説明して承諾が得られた人にイ

ンタビューを行った。インタビュー対象者は、成人期もしくは老年期にある人で、学生と血縁関係がある人、ない人どちらでもよいこととした。

- 2) 夏期休暇期間を利用してインタビューを計画し、インタビュー対象者の体調や都合に合わせるなど倫理的配慮を十分に行い、インタビュー対象者に「生まれてから現在までどのような生活をされ、どのように生きてきたか、今後どのような人生を送りたいか、生きている中で思いや気持ち」について1時間程度のインタビューを行った。
- 3) インタビューの内容およびインタビューを通して学んだことを3,600字程度のレポートに記述した。

4. データ分析方法

レポートには、インタビュー時のコミュニケーション内容である成人期・老年期にある人の生き方に関すること、学生がコミュニケーションにおいて工夫したことおよびインタビューを通して考えたことなどが記述されており、その記述内容全てを学生の学びとして捉え、分析の対象とした。レポートの記述内容は、成人期と老年期に分けて分析した。レポートの内容は意味のとれる一文で区切り、一つの記録単位とした。その一文を意味内容の類似性に沿って分類し、サブカテゴリを形成した。サブカテゴリにおいても同様の作業を反復し、カテゴリを形成した。それらの過程において共同研究者間で合意が得られるまで検討を繰り返した。

5. 倫理的配慮

本研究は、研究実施大学の研究倫理審査委員会の承認を得て行い、また下記の倫理的配慮を行なった。

レポート評価および「対象の理解I」の成績評価が終了した時点で学生に研究の説明を行い、成績に影響しないことを保障した。学生に研究の趣旨を説明し、承諾書の署名をもって同意を得た。研究に同意するかどうかは学生の自由意思によること、また途中で辞退できることを説明した。研究への協力に同意が得られた学生のレポートは、個人が特定されないよう匿名処理をし、レポートの複写および分析のデータは施錠保管し、研究終了後はシュレッダーにかけて破棄した。

夏休み課題（インタビュー）

I. インタビュー

1. 目的

- 1) 成人期・老年期の人へのインタビューを通して積極的にコミュニケーションを図り人との関わりを実体験する。
- 2) 成人期・老年期の人に関心を持ち、対象を個性のある一人の個人として理解する。

2. 目標

- 1) 自分と世代が違う成人期・老年期の人と積極的にコミュニケーションがとれる。
- 2) コミュニケーションのとり方・了解のとり方を学ぶことができる。
- 3) 対象の時代背景や生活歴の個性を捉え、インタビューした内容をまとめることができる。
- 4) インタビュー時の自分の態度を振り返ることができる。

3. 対象

- 1) 自分の親世代または祖父母世代に該当するような年齢の成人期・老年期にある人で、インタビューの趣旨を説明し、承諾の得られた一人にインタビューする。
- 2) インタビューする対象者は、血縁関係にある人でも、ない人でもどちらでもよい。
- 3) 自分で対象者を見つけられない場合は、7月中に教員（担当：〇〇・△△）に相談する。

4. 期間

夏期休暇開始時から8月中旬ごろのうち、1時間程度のインタビューに応じていただける日時と場所を、対象者と調整する。

5. 内容

生まれてから現在まで、どのような生活をされ、どのように生きてこられたのか。今後どのような生活や人生を送りたいか。生きている中での思いや気持ち（身体・心理・社会面などを含む）。

6. 注意事項

- 1) 事前に対象者の時代背景や、コミュニケーション技術、インタビューするときの留意点などについてテキストや図書館にある文献、インターネットなどで学習し、授業の振り返りを十分に行ってからインタビューに臨む。
- 2) 訪問時の挨拶はきちんと行い、所属・氏名などをはっきりと述べる。
- 3) 対象者の背景は多様であり、同じ言葉でも受け取り方は異なるので、言葉遣いには十分注意して話すようにする。
- 4) 清潔感のある服装や髪型、化粧にし、対象者に不快感を与えることのないように心がける。
- 5) インタビューの際、メモをとる場合は対象者の了承を得て、対象者の前では必要最小限のメモにとどめる。
- 6) インタビューした内容は、忘れないうち（できれば記憶が鮮明なその日のうち）に記録をする。
- 7) 血縁関係のない施設入居者にインタビューをする場合は、事前に教員（担当：〇〇・△△）に相談する。
- 8) インタビュー中に、対象者や施設との間で何らかのトラブルや対応に困る事態が発生した場合は、その場でできる限りの対応を行い、速やかに教員（担当：〇〇・△△）に電話、もしくは大学に登校して報告・相談すること。

7. 倫理的な配慮

- 1) 対象者にインタビューの目的・内容などを説明し、同意を得たうえでインタビューする。
- 2) インタビューの内容は、学習目的以外に使用しないこと、対象者のプライバシーを保護することを伝える。
- 3) 話したくないことや話しにくいことは、無理に話していただく必要がないことを伝える。
- 4) インタビューの日時・場所などは対象者と相談し、落ち着いた環境でゆっくり話ができるように配慮する。
- 5) インタビューしている間も、対象者の精神面や疲労感などをしっかり観察し、体調に合わせて時間や回数などを配慮する（1時間程度を目処とし、体調を確認する）。
- 6) インタビューで聴き逃したことや後で質問が出てきた場合、電話やメール、再訪問をしても差しつかえがないかどうかを伺い、その連絡方法などを確認する。

II. レポート

1. 内容

- 1) 対象者の属性（年齢〔～歳代（前半・後半）〕・性別・自分との関係〔関係が大まかに分かる程度〕など、個人情報は必要最小限とする）
- 2) インタビューした内容のまとめ
- 3) インタビューを通して心に残ったこと、学んだことなど
*「I-2. 目標」に照らし合わせて振り返りを行う

2. 書き方

- 1) 表紙をつけ、授業名「対象の理解 I」、テーマ「成人期・老年期の人々の理解」、大学名、学部名、学科名、学籍番号、氏名を明記する。
- 2) できる限りワープロ入力とし、A4サイズの用紙（横書き）、明朝体、10.5 pt、余白は上下左右2.5 cm程度、1枚40字×30行で2～3枚（3,600字）程度とする。
手書きの場合は、A4サイズの400字詰め原稿用紙（横書き）で6～9枚（3,600字）程度とする。
- 3) 文献を使用し、自らの考えを深めるようにする。レポートの最後に活用した文献を記入する。

3. 提出

- 1) レポートまとめ役：学籍番号 氏名 さん
学籍番号 氏名 さん
- 2) 提出：2005年9月1日（木）12:50までに、上記まとめ役の人に提出する。
- 3) 上記まとめ役の人、レポートを学籍番号順に揃えてひとまとめにし、同じ日の13:00までに助手室に提出する。
- 4) 自己学習用として、レポートを提出する前に各自で1部コピーをとって保存しておくこと。
連絡先：電話△△△-〇〇〇-□□□（代表）
教員：〇〇・△△・□□

IV. 結 果

1. インタビュー対象者の背景（表1，表2）

成人期にあるインタビュー対象者の年代分布は40歳代～64歳であり，老年期は65歳～90歳代であった。

成人期にあるインタビュー対象者は24人（38.7%）で，40歳代と50歳代がほぼ半数ずつであった。老年期は，38人（61.3%）で，70歳代が最も多く，その次に80歳代が多かった。また属性では男性18人（29.0%），女性44人（71.0%），学生と血縁関係がある52人（83.9%），血縁関係がない10人（16.1%）であった。

2. 成人期にあるインタビュー対象者の理解

インタビューを通して学生が学んだことを分析した結果，成人期にあるインタビュー対象者の理解に関して，【高度経済成長期を生きた】【学生生活を楽しんだ】

表1 インタビュー対象者の年代 n=62

	人 (%)
40歳代	11 (17.7)
50歳代	11 (17.7)
60歳代	7 (11.3)
70歳代	19 (30.6)
80歳代	13 (21.0)
90歳代	1 (1.7)
計	62 (100)

表2 インタビュー対象者の性別・学生との関係性 n=62

	成人期 (%)	老年期 (%)	人 (%)	
性別	男性	7 (29.2)	11 (28.9)	18 (29.0)
	女性	17 (70.8)	27 (71.1)	44 (71.0)
学生との関係性	血縁者	20 (83.4)	32 (84.2)	52 (83.9)
	非血縁者	4 (16.6)	6 (15.8)	10 (16.1)
	計	24 (100)	38 (100)	62 (100)

【自己実現のために仕事をする】【家族で支えあう】【今を大切に生きる】の5つのカテゴリが形成された（表3）。

以下，カテゴリを【 】，サブカテゴリを《 》，主なデータを「 」で示す。

1) 【高度経済成長期を生きた】

データにはインタビュー対象者が生きてきた時代背景や生活環境が表されていた。インタビュー対象者は，幼少時代を自然に囲まれた環境の中で過ごしていた。当時はトイレや水道などの生活環境が整っておらず，機械技術や医療技術も進歩していなかった。そして，学童期から青年期にかけて高度経済成長期の真只中で過ごし，電化製品の普及や交通の発達，西洋文化の普及など生活様式が急速に近代化する中で成長した。また教育制度が整備され，子どもの時から恵まれた環境で十分な教育を受け，人によっては幼稚園や学習塾にも通うことができるようになった。

これらのデータから《田舎で育った》《医療技術が進歩していなかった》《西洋文化が普及してきた》《教育環境の整備が始まった》《女性の社会的立場が弱かった》《高度経済成長期を生きた》の6つのサブカテゴリ，【高度経済成長期を生きた】というカテゴリが形成された。

「友達と空き地で野球をしたり，魚釣りをしたり，神社で木登りをして遊んだ」

「兄はその当時流行っていた流行病で亡くなった」

「モノクロテレビ，洗濯機，電気冷蔵庫などが普及してきたころで，アメリカのTV番組を見て憧れていた。東京オリンピックの開催，新幹線や名神高速道路開通などの時代に生まれ育った」

「町も徐々に栄え，人口増加のため学校は木造2階建てから鉄筋校舎へと変わっていった」

表3 成人期にあるインタビュー対象者の理解

カテゴリ	サブカテゴリ
高度経済成長期を生きた	<ul style="list-style-type: none"> 田舎で育った 医療技術が進歩していなかった 西洋文化が普及してきた 教育環境の整備が始まった 女性の社会的立場が弱かった 高度経済成長期を生きた
学生生活を楽しんだ	<ul style="list-style-type: none"> 学生生活を楽しんだ 学生運動で自己主張をした 自我が芽生えた
自己実現のために仕事をする	<ul style="list-style-type: none"> 資格を取得する 自由に職業を選ぶ 仕事にやりがいを感じている 自分のために仕事をする
家族で支えあう	<ul style="list-style-type: none"> 大事に育てられた 結婚して子どもに恵まれた 家族の中で役割がある 家族を想い合う
今を大切に生きる	<ul style="list-style-type: none"> 人との関係から多くのことを学んだ 困難を乗り越えて生きている やりたいことがある 今後も前向きに生きたい 身近な人を喪う

2) 【学生生活を楽しんだ】

データにはインタビュー対象者の学生生活の過ごし方が表されていた。インタビュー対象者は、青年期にはクラブ活動を楽しんだり、学生運動を通して自己主張をしたりして、学生生活を謳歌していた。自我が芽生え、自己を見つめる中で、自分の意思を大切にしながら生きてきた。

これらのデータから《学生生活を楽しんだ》《学生運動で自己主張した》《自我が芽生えた》の3つのサブカテゴリ、【学生生活を楽しんだ】というカテゴリが形成された。

「一生懸命活動し、3年間テニスクラブに明け暮れた」

「学生運動は危険で、友人の何人かは警察に捕まったり、学校を占拠するのに加わった」

「大学時代の頃に『人はどうして生きているのだろう』『人生とは何だろう』と思いをめぐらした」

3) 【自己実現のために仕事をする】

データにはインタビュー対象者の職業への姿勢が表されていた。インタビュー対象者は、学歴を身につけ資格を取得しながら自己研鑽をし、やりたいことを見つめながら自らの意思で職業を選び、現在も自己実現を目指して仕事をしている。また、経済的な安定を図り家族を養うという目的を果たすために、日々仕事に取り組んでいる。

これらのデータから《資格を取得する》《自由に職業を選ぶ》《仕事にやりがいを感じる》《自分のために仕事をする》の4つのサブカテゴリ、【自己実現のために仕事をする】というカテゴリが形成された。

「手に職をつけたほうがいいと思い、調理師専門学校に進んだ」

「今の仕事は天職だと思う。利用者に優しくできる自分であることが幸せ」

「人と関わることでたくさん勉強できる。働けるだけ働いて常に自分を成長させていきたい」

4) 【家族で支えあう】

データにはインタビュー対象者が生まれ育った家族と現在の家族について表されていた。インタビュー対象者は、その親世代に比べて家族や兄弟の数が少なく、親から大事に育てられた体験をしていた。そして成人期となった現在、結婚して家庭を築く中で子どもの成長を見守り、さらに親の介護をしながら家族で支えあう姿勢を大切にしながら生きている。

これらのデータから《大事に育てられた》《結婚して子どもに恵まれた》《家族の中で役割がある》《家族を想い合う》の4つのサブカテゴリ、【家族で支えあう】というカテゴリが形成された。

「初めての女の子で、他の兄弟より恵まれて育った。誕生日プレゼントは1人だけ与えられた」

「夫や子どもに『行ってらっしゃい』が言え、子どもと接する時間が増えたことが嬉しい」

5) 【今を大切に生きる】

データにはインタビュー対象者が前向きに生きている姿勢が表されていた。インタビュー対象者は、仕事や家庭、人との関係を通して多くのことを学んでおり、また病気や障害、災害など様々な困難を乗り越えて生きている。それらの体験を通して人として成長し続けている。そして、仕事や趣味などでやりたいことを持ち、積極的に生きる姿勢を大切にしている。

これらのデータから《人との関係から多くのことを学んだ》《困難を乗り越えて生きている》《やりたいことがある》《今後も前向きに生きたい》《身近な人を喪う》の5つのサブカテゴリ、【今を大切に生きる】というカテゴリが形成された。

「仕事ではお客さんとの対応の中で勉強できることもあるし、ためになることも多い」

「山で遭難し、濃い霧の中足を滑らし転落した。以後歩くことができなくなった」

「人生は山あり谷ありだが、感動をいっぱい味わえるように前向きに生きて行きたい」

3. 老年期にあるインタビュー対象者の理解

インタビューを通して学生が学んだことを分析した結果、「老年期にあるインタビュー対象者の理解」に関して、【家を守る】【家族で支えあう】【戦争を生き抜いた】【死を受け止める】【今を大切に生きる】の5つのカテゴリが形成された(表4)。

以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリを《 》、主なデータを「 」で示す。

1) 【家を守る】

データにはインタビュー対象者が家制度の中で生きてきたことが表されていた。インタビュー対象者は、昔ながらの日本の風習である家制度の中で、結婚や仕事も自由に選択することができず、戸主である父親や嫁ぎ先の厳格な風習や習慣に従うように生きてきた。

これらのデータから《家制度を守る》《結婚して子ど

表4 老年期にあるインタビュー対象者の理解

カテゴリ	サブカテゴリ
家を守る	<ul style="list-style-type: none"> ・家制度を守る ・結婚して子どもに恵まれる
家族で支えあう	<ul style="list-style-type: none"> ・同居家族数が多い ・家族と居ることの幸せ ・お互いに支えあう ・家族を介護する ・子どもも仕事をする ・一生懸命仕事をする
戦争を生き抜いた	<ul style="list-style-type: none"> ・戦争の悲惨さ ・空襲の恐怖 ・疎開生活 ・勉強したくてもできなかった ・食べるものがない生活 ・ものがない生活 ・裕福な生活へのねたみ ・束の間の楽しみ
死を受け止める	<ul style="list-style-type: none"> ・死を迎える準備をする ・身近な人を失う ・支えられて生きている
今を大切に生きる	<ul style="list-style-type: none"> ・自然と共に生きる ・根性で生きる ・ものを大切にする ・人との交流を大切にする ・感謝して生きる ・今を前向きに生きる ・健康第一の生活 ・戦争を繰り返さないことを願う

もに恵まれる》の2つのサブカテゴリ、【家を守る】というカテゴリが形成された。

「ご飯が炊けるとまずは戸主である舅に盛り、嫁である自分は最後におこげができた部分を食べていた。家の中での立場を重んじており、それに従って生きていかなければならなかった」

2) 【家族で支えあう】

データにはインタビュー対象者が育ってきた家庭環境や生活背景が表されていた。インタビュー対象者は、兄弟が3～12人おり、三世代以上が同居するなど大勢の家族の中で育った。また、教育制度が整っていないことや貧困のため十分な教育を受けることができなかった。子どものときから働き手の一員として家事や育児など仕事を分担し、家族で支えあいながら生きてきた。

これらのデータから《同居家族が多い》《家族といることの幸せ》《お互いに支えあう》《家族を介護する》《子どもも仕事をする》《一生懸命仕事をする》の6つのサブカテゴリ、【家族で支えあう】というカテゴリが形成された。

「次女として生まれてきました。兄弟は全部で8人になり、大家族の中の1人でした」

「毎日百姓を手伝えと言われ、『勉強なんてしないでいいから、百姓を手伝いなさい』と怒られた」

3) 【戦争を生き抜いた】

データにはインタビュー対象者の戦争体験が表されていた。インタビュー対象者は、戦争の悲惨さや空襲の恐怖を体験し、社会全体が貧しく食べものや物資がなく、贅沢ができなかった。また勉強したくてもできない時代を生きてきた。

これらのデータから《戦争の悲惨さ》《空襲の恐怖》《疎開生活》《勉強したくてもできなかった》《食べるものがない生活》《ものがない生活》《裕福な生活へのねたみ》《束の間の楽しみ》の8つのサブカテゴリ、【戦争を生き抜いた】というカテゴリが形成された。

「餓死する人もたくさんいたが、生き残るのに精一杯だったので助けたくても助けられなかった」
 「地上にいたら瓦礫などが飛んでくるから、必ず路線沿いに歩いて空襲があったらすぐに近くの駅の地下ホームに避難した」
 「小学校5年間は学校がほとんどなく、学徒動員として軍事工場で働かなければならなかった」

4) 【死を受け止める】

データにはインタビュー対象者の死への想いが表されていた。インタビュー対象者は、悲惨な戦争を生き抜き、配偶者や身近な人たちの死を経験する中で他者の死を受容し、自らの老いや死を受容する準備を始めている。

これらのデータから《身近な人を喪う》《死を迎える準備をする》《支えられて生きている》の3つのサブカテゴリ、【死を受け止める】というカテゴリが形成された。

「今では仲良しの友達も亡くなったりして、愛想もなく寂しい感じがします」

「残り少ない人生やから、子供に迷惑をかけないように安らかに静かに死を迎えたいわ」

5) 【今を大切に生きる】

データにはインタビュー対象者の前向きな生き方が表されていた。インタビュー対象者は、戦争などの影響でものがない生活を体験しており、ものを大切にす

る姿勢や、友人達と交流を大切にしながら生きている。そして、生きがいを持って今を前向きに生きる姿勢を大切にしている。

これらのデータから《自然と共に生きる》《根性で生きる》《ものを大切にする》《人との交流を大切にする》《感謝して生きる》《今を前向きに生きる》《健康第一の生活》《戦争を繰り返さないことを願う》の8つのサブカテゴリ、【今を大切に生きる】というカテゴリが形成された。

「嫁入り道具で持ってきた箆笥を大切に使っている。死んだら祖父からもらった櫛を棺おけに入れて欲しい」

「お世話になった人や、育ててくれた土地に何かしら恩返しができるらいいと思うの」

「毎日畑で菜園を楽しんでいる。各地に足を運び、懐かしい友人や親戚に会っている」

4. インタビュー対象者とのコミュニケーション

インタビューを通して学生が学んだことを分析した結果、「インタビュー対象者とのコミュニケーション」に関して、成人期・老年期の各世代においてデータが類似しており、共通して【対象者に関心を持つ】【対象者に配慮する】【言葉の意味を大切にする】の3つのカテゴリが形成された(表5)。

以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリを〈 〉, 主なデータを「 」で示す。

1) 【インタビュー対象者に関心をもつ】

データにはインタビュー対象者と円滑なコミュニケーションを図るためには、インタビュー対象者の時代背景や生き方に関心を持つことの重要性が表されていた。

これらのデータから《インタビュー対象者に関心をもつ》《インタビュー対象者の背景を知る》《インタビュー対象者を尊重する》《信頼関係を築く》《温かい気遣いを受け止める》の5つのサブカテゴリ、【インタ

ビュー対象者に関心を持つ】というカテゴリが形成された。

「相手が生活してきた背景を事前に調べておくと、コミュニケーションが円滑になると分かった」
 「人生というものは人が必死に生きてきた証でかけがえのないものであるから、人の人生をけなしたり、傷つけたりしてはいけないと感じた」
 「祖母は私が理解できなかったり、聞き取れずもう一度聞き直したりしても嫌な顔をせずにつき合ってくれた」

2) 【インタビュー対象者に配慮をする】

データにはインタビュー対象者と円滑なコミュニケーションを図るために、相手の体調を気遣うことの必要性や、相づちを打ったり座る角度を配慮するなどのコミュニケーションスキルの重要性が表されていた。

これらのデータから《インタビュー対象者のペースに合わせる》《相づちを打つ》《目を合わせて話す》《座る位置を考える》《時間を配慮する》《インタビュー対象者を受容する》の6つのサブカテゴリ、【インタビュー対象者に配慮をする】というカテゴリが形成された。

「相手の体調や生活に合わせてインタビューの回数や時間を分け、休憩を入れることも大切であると気づいた」

「相手が言ったことを繰り返し、『そうですね』『なるほど』など相槌を入れることも大切だ」

「目を見てうなずいて話を聴くことは、相手に『この人に話をしよう』という気にさせる」

「相手は照れていたの、座る位置を斜め45度にし、直視を避けると話しやすくなったようだ」

3) 【言葉の意味を大切にする】

データにはインタビュー対象者とのコミュニケーションを通して、言葉の意味を読み取り、文脈を理解することを困難と感じ、自分自身の課題であると認識した学生の想いが表されていた。

表5 インタビュー対象者とのコミュニケーション

カテゴリ	サブカテゴリ
インタビュー対象者に関心をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー対象者に関心をもつ ・インタビュー対象者の背景を知る ・インタビュー対象者を尊重する
インタビュー対象者に配慮をする	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼関係を築く ・温かい気遣いを受けとめる
言葉の意味を大切にする	<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー対象者のペースに合わせる ・相づちを打つ ・目を合わせて話す ・座る位置を考える ・時間を配慮する ・インタビュー対象者を受容する
	<ul style="list-style-type: none"> ・敬語を使う ・言葉の意味を取る ・言葉に詰る ・質問方法を考える

これらのデータから《敬語を使う》《言葉の意味をとる》《言葉に詰る》《質問方法を考える》の4つのサブカテゴリ、【言葉の意味を大切にする】というカテゴリが形成された。

「年上の人に話す際に、言葉遣いが適さないところがあった」

「相手の感じ方、考え方を間違えて解釈することがあるため、確認の作業を怠ってはならない」

「辛い過去の話だったので、あまり触れてはいけない気がして少ししか質問ができなかった」

「どこまで深く追求して聴いていいのか、どう話しかけるか、どう表現するかなどに困った」

V. 考 察

1. インタビュー対象者の理解に関する学び

学生が成人期・老年期にあるインタビュー対象者をどのように理解したかについて、カテゴリおよびカテゴリ間の関連性を以下に述べる。

1) 成人期にあるインタビュー対象者の理解

現在40～60代前半のインタビュー対象者は、幼少期には都市が未開発で多くの自然に囲まれた環境の中で過ごしたが、学童期・青年期には高度経済成長期に入り、生活が著しく近代化する中で過ごしてきた。学生はインタビュー対象者が【高度経済成長期を生きた】という特徴的な時代背景や生活環境の中で生まれ育ったことを理解していた。

また、インタビュー対象者は子どもの時から教育制度や施設が整備される中で、十分な教育を受けてきた。青年期には「人はどうして生きているのだろうか」「人生とは何だろうか」と思いをめぐらし、学生運動を通して自己を見つめ、自分の意思を大切に、さらに発達課題であるアイデンティティを獲得しながら【学生生活を楽しんだ】姿を学生は理解していた。

成人期の発達段階において社会の担い手として働き、一定の経済的生活水準を築き、それを維持するという課題がある⁷⁾。学生は、インタビュー対象者が学歴や資格を取得しながら自己研鑽をし、【自己実現のために仕事をする】姿を捉えており、成人期の発達課題に取り組んでいることを理解していた。

インタビュー対象者は、その親世代に比べて家族や兄弟の数が少なく、大切に育てられた。そして、現在は結婚して家庭を築く中で配偶者と人間的に結びつき、子どもが成熟した人間となるように支援し、両親の老

後を見守るなど【家族で支えあう】中で、家族に対する責任を果たそうとする姿勢を大切にしている。そして学生は、インタビュー対象者が各世代の発達課題を乗り越えながら自己の生き方を見つめ、家族で支えあう体験が、【今を大切に生きる】姿勢の礎になっていることを理解していた。

2) 老年期にあるインタビュー対象者の理解

現在60代後半～90代のインタビュー対象者は、子どもや家族の人数が多い家庭で育ち、昔ながらの【家を守る】という日本の風習の中で、結婚や仕事も自由に選択することができず、戸主である父親や嫁ぎ先の慣習に従うように生きてきた。学生は、インタビュー対象者が子どもの時から家事や育児など家の仕事を分担し、【家族で支えあう】姿勢を大切にしながら生きていくことを理解していた。

そして、インタビュー対象者は【戦争を生き抜いた】体験をしており、戦争の影響で社会全体が貧しく食べ物や物資がないため、贅沢をせず勤勉に生活してきた。

学生は、インタビュー対象者が悲惨な戦争を生き抜き、配偶者や身近な人たちの死を経験する中で他者の死、そして自らの死を受容し、【死を受け止める】姿勢でいることを理解していた。

さらに老年期の発達段階において、自分と同じ年頃の人々と明るい親密な関係を結ぶこと⁸⁾も課題である。学生は、インタビュー対象者が生きがいを通して友人達と交流を持ちながらいきいきと生きていることを受け止めていた。そして学生は、インタビュー対象者の貧しい生活の体験、幼少期から青年期にかけての【戦争を生き抜いた】体験、老年期の発達課題である【死を受け止める】体験が、現在のものや人との交流を大切にしながら【今を大切に生きる】姿勢の礎になっていることを理解していた。

今回、成人期・老年期の各世代において【家族で支えあう】【今を大切に生きる】という共通のカテゴリが形成された。このことは、世代が異なっても【家族で支えあう】ことや【今を大切に生きる】ことは、人が生きていく上で欠くことのできない共通の課題であることが示唆された。

しかし、これらのカテゴリにおいても、各世代で形成されたサブカテゴリやデータの内容には違いが見られた。例えば【家族で支えあう】に関して、成人期では《大事に育てられた》というサブカテゴリの中に、

「初めての女の子で、誕生日プレゼントは1人だけ与えられた」というデータがあり、子どもの数が少なく親から大切に育てられていた。

一方、老年期では《同居家族が多い》《子どもも仕事をする》というサブカテゴリの中に、「兄弟は全部で8人になり」や「『勉強なんてしなくていいから、百姓を手伝いなさい』と怒られた」とあり、子どもの数が多く、生計を立てるために子どもも仕事を手伝っていた。これらのことから、家族には子どもを生き育てる機能や教育的機能、経済的機能、家族の健康管理と養育などがあるが、時代背景や文化が異なれば、家族の構成人数や役割、親子の関係性なども異なってくるということが明らかとなった。

インタビュー対象者の世代によって違いが見られたカテゴリとして、成人期では【高度経済成長期を生きた】、老年期では【戦争を生き抜いた】の時代背景に関するものと、成人期では【自己実現のために仕事をする】、老年期では【死を受け止める】の発達課題に関するものがあつた。

今回のインタビュー対象者は、成人期は40～60代前半、老年期は60代後半～90代と各世代の間において約30年の年齢の幅があつた。レポート内容を分析したところ、30年の開きがあると生活様式や社会情勢などから体験してきた内容も大きく異なっていた。このことは、対象者を理解しようとするとき、成人期・老年期とひとくくりにはできないことを認識し、あくまでも個としての対象を理解することが大切であることが示唆された。

人は、生まれ育つた家庭環境や社会の中でその人固有の考え方、価値観や信念を築き、その人なりの生活様式を持って生活をしている。それらの価値観や生活様式は自然環境あるいは文化、社会環境によって影響を受け、また逆にその人が文化や環境を変化させており、相互に作用している。看護の対象となる人を理解するには、その人が生きてきた家庭環境や文化、社会環境などあらゆる背景を把握することで初めて個としての対象を総合的に理解できる。学生は身近な成人期・老年期にある人にインタビューを行い、インタビュー対象者の生まれ育つた家庭環境や社会環境、現在の生き方、家族への想いなどを把握し、個としての対象を理解する手がかりを得ていた。

2. インタビュー対象者とのコミュニケーションに関する学び

学生は、インタビュー対象者と接することにより、

コミュニケーションの重要性を認識していた。学生が認識したコミュニケーションの要素について、カテゴリおよびカテゴリ間の関連性を以下に示す。

データに、「相手が生活してきた背景を事前に調べておくと、コミュニケーションが円滑になると分かった」とあるように、学生はインタビュー対象者が生まれ育つた社会情勢や生活文化などの時代背景を知り、インタビュー対象者の体験を捉えなおすことでさらに深く話を聴くことができ、理解が深まることを理解していた。このことから、コミュニケーションをより円滑にするには、【インタビュー対象に関心をもつ】ことが大切であり、その上でコミュニケーションを展開していく必要があることを学んでいた。

学生は、インタビューの途中で意識的にインタビュー対象者の表情や言動などの反応を観察し、その場の雰囲気や相手の気持ちを感じ取り受け止める必要性を理解していた。また、話をする時間帯や早さ・内容などを考慮し、相づちを打ったり、ペースを合わせるなどの配慮をすることの大切さを理解していた。

さらに学生は、インタビュー対象者の言葉の奥に含まれる背景や気持ちを読み取ることを困難に感じ、どのように反応を示してよいか戸惑っていることを自覚していた。このことは、インタビュー対象者が発した【言葉の意味を大切にすること】の難しさを認識し、さらにその重要性に気づいていたことがうかがえた。

人は、一人ひとり物事に対する感じ方、考え方が異なる。それは、その人が育ってきた自然環境、社会環境、人間関係、その中で生活経験、行動経験によって形成されてくるからである。それらを踏まえて対象を理解するため、学生は対象に関心を寄せ、配慮し、言葉の意味から文脈を理解していくというコミュニケーションの能力を高める必要があることを学んでいた。

3. インタビューを取り入れた教育方法の効果

1時間程度のインタビューで、日常生活の中では聞くことのできないインタビュー対象者の家族への想い、生きることへの想いなどが語られていた。志村⁹⁾は、対象者と向き合い、対象者の歩んできた人生の出来事を丁寧に聴く作業は、対象者を理解するきっかけにつながり、信頼関係の構築のきっかけになりうること、そして一人ひとり異なる人生を歩んできた対象者の歴史に耳を傾けることは、その人らしさを支えることにつながると述べている。それと同様に、今回学生はインタビューを通して初めてインタビュー対象者の生き

てきた背景を丹念に聴き、その過程の中で理解を深め、信頼感を得て心の距離を近づける努力をしていた。また学生は、インタビュー対象者には生きてきた背景があり、その生活背景が礎となって現在の生き方があるということを理解していた。

看護はあらゆる世代の人を対象として実践する。看護を実践するにあたり、看護師と対象がお互いに意思・感情・知識などを伝達し、理解するためにコミュニケーションは欠くことのできないものである。しかし現代は生活環境の変化により、異なる世代の人とコミュニケーションを交わす機会が減少し、コミュニケーションが円滑に図れず、深い関わりを体験することも少なくなっている。学生は、インタビューを通して世代の異なるインタビュー対象者の生活背景や生きる中での想いを知ること、いきいきと生きている人であることを理解するとともに、その人を理解するためにはコミュニケーションの工夫が必要であるという認識を深めていた。

そして、インタビュー対象者のうち学生と血縁関係がある人は、成人期・老年期を合わせて83.9%を占めており、多くの学生は身近な人にインタビューをしていた。身近な人へのインタビューを通して、学生はインタビュー対象者の新たな一面を発見しており、驚きや尊敬の念を抱いていた。このことを通して、たとえ身近にいる人であってもその人のことを知っていると決めつけず、常に真摯な気持ちで向き合い、コミュニケーションを通して理解しようとする姿勢が必要であるということを学んでいた。

また、学生はコミュニケーションを通して、自己とインタビュー対象者の時代背景や生活環境の違い、ものの見方や考え方の違い、そしてコミュニケーションのベースや言葉の捉え方の違いを改めて認識し、個としての対象を理解していた。今回、学生がインタビュー対象者の世代の特徴や時代背景について事前に学習を深めてからインタビューに臨んだことは、講義で学んだ様々な知識を統合すると共に、個としての対象を理解する有用な機会につながったと考える。

学生が自らインタビュー対象者を選び、インタビューの目的や方法を説明して対象の同意を得、質問内容を考えながらインタビューしたことは、対象と意図的にコミュニケーションを図り、人間関係を構築するプロセスを学ぶ有用な機会であったと推察できる。

今後、1人の学生が成人期・老年期の両方の世代にインタビューすることにより、対象の時代背景の違いや個々のものごとの捉え方の違いについて、より一層

理解が深まると考える。学生が世代間の違いを統合して認識することが今後の課題である。

VI. 結 論

本研究の結果、インタビューは学生が対象を理解するにあたり、以下の学びが得られたという点で有効な学習方法であることが示唆された。

1. 学生は、対象それぞれに生きてきた時代背景や生活環境が異なり、過去に積み重ねてきた生活背景が現在のその人の生きる姿勢に影響していることを学んでいた。
2. 学生は、対象を理解するためには、その人に関心を持ち、配慮や尊重した態度を示しながらコミュニケーションを展開し、人間関係を構築することが重要であることを学んでいた。
3. 学生は、対象とコミュニケーションを図る中で自己と他者の違いを改めて認識し、個としての対象を理解していた。

謝 辞

本研究を行うにあたり、学生に生活史を語ることに理解を示され、快くインタビューに応じていただきました方々と、研究にご協力いただいた学生に心からお礼を申し上げます。

本研究の一部は、第32回日本看護研究学会学術集会(別府)および第26回日本看護科学学会学術集会(神戸)において発表した。

引用文献

- 1) 鳴澤 寛. 若者達と対人関係ストレス 一般大学の教育の立場から. 日本看護教育学会誌 2002;9(4): 42-5.
- 2) 小泉美佐子. 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果. 老年看護学 2000;5(1):140-6.
- 3) 吉本知恵. 看護学生の老年期にある人の理解を深めるための教育方法——在宅老年期にある人へのインタビューからの学び——. 香川県立医療短期大学紀要 2002;4:105-11.
- 4) 鶴田晴美. 壮年期の人の理解に親へのインタビューを導入した学習方法の効果——インタビュー内容と学生の反応から——. 日本看護学会誌 2001;1: 2-12.
- 5) 八島妙子. 老年期にある人の語りを通しての学生と老年期にある人の相互理解. 日本看護学教育学会誌 2004;14:193.

- 6) ホロウェイ, ウィーラー. ナースのための質的研究入門——研究方法から論文作成まで. 東京: 医学書院; 2000. p. 197.
- 7) 舟島なをみ. 看護のための人間発達学. 東京: 医学書院; 2005. p. 165-214.
- 8) 服部祥子. 生涯人間発達論 人間への深い理解と愛情を育むために. 東京: 医学書院; 2002. p. 109-46.
- 9) 志村ゆず. ライフレビューブック 高齢者の語りの本づくり. 東京: 弘文堂; 2005.
- 3) 宮地真澄, 大町弥生他. 老年看護学実習における学生の高齢者理解——ケーススタディの内容分析から——. 藍野学院紀要 2005; 19: 43-9.
- 4) 寺門とも子, 大塚邦子他. 高齢者理解のための効果的な学習方法——看護学生の個人史インタビューによる人生観・健康感の学び——. 老年看護学 2002; 7(1): 88-94.
- 5) 小泉美佐子, 伊藤まゆみ他. 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューを取り入れた学習効果. 老年看護学 2000; 5(1): 140-6.
- 6) 森 仁実, 松下光子他. 「生活史の聴き取り体験」による対象理解に関する学びの内容. 岐阜県立看護大学紀要 2002; 2(1): 111-6.
- 7) 山本恵子, 生野繁子他. 高齢者のライフイベントからの学び——学生による高齢者へのインタビューを通して——. 日本看護福祉学会誌 2003; 9(1): 33-4.

参考文献

- 1) Martha E. Rogers, 樋口泰子, 中西睦子訳. ロジャーズ看護論. 東京: 医学書院; 1979. p. 3-4.
- 2) 大森武子, 大下静香他. 仲間とみがく看護のコミュニケーションセンス. 東京: 医師薬出版株式会社; 2003.